

## 追悼

## 水城まさみ先生



## 水城まさみ先生 追悼文 (その1)

日本臨床環境医学会顧問ならびに環境過敏症分科会副代表として、長年にわたり、本学会のためにご貢献されました水城まさみ先生が9月3日、72歳でご逝去されました。水城先生は日本を代表とする環境過敏症の専門医で、環境過敏症研究の第一人者として国立病院の機関誌の最高賞・塩田賞を2度受賞されました。室内空気汚染物質の実測を推進し、その実測値に基いた住環境改善を勧奨しました。患者の訴えにじっくりと耳を傾け、科学的知見に裏付けられた治療に当たる医師との評判が高く、日本各地から先生を慕う患者さんが殺到しました。With コロナ時代に消毒剤やテレワークにより、環境過敏症患者が急増することを危惧されておられました。この時期に先生を失ったことは誠に残念でなりません。水城先生の多大なご功績を忍び、ご冥福をお祈り致します。

先生は1974年岩手医科大学医学科をご卒業、母校の第三内科医師としてご勤務、1981年に大分大学医学部第三内科に転勤され、そこで医学博士の学位を取得され講師に昇進しました。1999年—2000年にスウェーデンのカロリンスカ研究所病院にご留学、ホルムアルデヒドによる健康被害のご研究をされました。2002年に、夫の岩手医科大学口腔外科教授就任に伴い、国立病院機構盛岡医療センター呼吸器内科・アレルギー科に転勤され、

亡くなる2か月前までご勤務、2003年から2018年まで副院長という要職を兼務されました。

私をはじめ先生にお目にかかったのは、日本アレルギー学会会場でした。お互いQEESIを使った研究発表をしていたこともあり、環境過敏症の病態解明をライフワークとする同じ女性研究者として、意気投合して、その後約15年間、共同研究をさせていただきました。患者さんの臨床データをいただくためには、各医療機関に倫理申請をすることが不可欠です。先生は“北條先生が英語で論文を書いてくれることは日本の患者さんにとっても大事なことです。”と、大変ご多忙中、盛岡医療センターの倫理申請書を書いて下さるだけでなく、他の国立病院系の医療機関の先生方にもお手紙を書いて下さいました。私が環境過敏症の疫学研究を続けられますのは、一重に水城先生のおかげだと深く感謝しております。

2年前に初めて受けた人間ドックで、ステージIVのすい臓癌が見つかった時に、“生きていられることに感謝し、命尽きるまで、患者さんの診察治療に当たりたい。また執筆中の本、「化学物質過敏症対策：専門医・スタッフからのアドバイス」を早く完成させたい。”とメールを下さいました。今年の7月にいただいた最後のメールでは、“第一校正まで完了したので、8月末には出版予定です。出版されたら、真っ先に黒岩先生と北條先生

に献本しますね。こうご期待！”と書かれてありました。第二校正の完了直後に、病状が急変し、第三校正は宮田幹夫先生など共著者とご家族様でなされ、9月17日に待望の書籍が発行されました。本の出版を見ることなく亡くなられたことは、残念でたまりません。御遺著を拝見し、苦しい闘病生活の中で、こんなにも素晴らしいご本をご執筆されたかと思うと、ただただ、頭が下がります。

今後は、この御遺著を一人でも多くの方に読んでいただくように普及しながら、環境過敏症の研究を続けることが、残された私達の責任だと考えております。先生、長い間、本当にお疲れ様でした。本当に、ありがとうございます。合掌。

追記：ご遺影をご提供して下さいましたご主人様に深く御礼申し上げます。

また、水城先生のご遺書「化学物質過敏症対策；専門医・スタッフからのアドバイス（緑風出版）」の書評は、同誌に、黒岩義之先生がご執筆して下さいますので、読んでいただければ幸いです。

2020年11月記

（環境過敏症分科会代表 北條祥子）

## 水城まさみ先生 追悼文（その2）

お亡くなりになられて益々先生が掛替えのない先生であったことを思い知らされております。

コロナウイルス ID19の最中で外出を控えることが常識でしたが、私は盛岡のお別れ会に出させて頂きました。

ご家族、先輩、ご友人の方々からのお別れの言葉をお聞きして、私には驚きの連続でした。先生が岩手医大を選ばれた理由が岩手県内での医療福祉行政に感激してとのことでした。初心からして普通の方ではなかったのです。患者や、弱者に寄り添うというお考えが、先生を常に突き進ませていたのでしょうか。医学は患者より前には歩けません。患者の数歩後を気付いた医師が追いかけます。臨床の現場ではエビデンスが確立するのを待てないのです。アレルギーも化学物質過敏症もいまだに分からない所が多いのですが、本当に先生は患者に寄り添い、患者第一で歩み続けられまし

た。アレルギーの患者さんのためには、アレルギー研究のメッカであるスウェーデンのカロリンスカ研究所に赴かれて、研究をされました。医学部解剖学実習室のホルムアルデヒド問題などでも活躍されました。個人的なことですが、解剖学実習でうつから自殺した私の同級生はこれで浮かばれたと思います。化学物質過敏症の患者さんの苦痛を聞けば、診療のためには国立病院機構盛岡病院にその特殊外来を開設されて、患者の診療のために精一杯頑張られたのです。すでに日本のぜん息専門家として名を馳せられていたにも関わらず、患者の苦しみを見かねて、苦勞の多い専門外来を立ち上げられたのです。

さらに驚かされたのは、お別れ会の会場に展示されていた先生の素晴らしい絵でした。アレルギーも、化学物質過敏症も、難治性で、非常にストレスを発生させやすい、その忙しい中でも持ち続けられた先生の心の豊かさと優しさを垣間見させて頂きました。先生によって、体だけではなく、心も癒された方もおみえだったのではないかと思います。

化学物質過敏症の診療に携わった石川哲初代臨床環境医学理事長や私のような第一世代が消滅する前に、何らかの里程標を立てておきたいと、先生は「プロブレム Q & A 化学物質過敏症対策（緑風出版）」を企画されました。

私よりお歳の若い先生が先に亡くされるといふ逆縁になってしまったことがとても残念です。それでも、完全脱稿を確認された翌日に安心して永眠されました。この本の完成が間に合わなかったのが残念ですが、脱稿を確認されたのがせめてもの救いです。本の中身は先生の患者に寄り添おうとする姿勢が各所にみられます。

先生の法灯を継ぐべく若手の医療関係者が今後も現れ続けると信じています。私も命の続く限り、先生に恥じない様に歩きます。

先生は医師として全力で働かれました。本当にありがとうございます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（そよ風クリニック院長 宮田幹夫）